

月岡城

「中世における武士の活動のあかしの一つに山野に遺存する城砦跡や館跡などがある。

山城跡は、地方の有力武士たちが、有事に備えて保有した退避、籠城用の城砦である。強敵が領内を侵し、反撃も空しく館を放棄するに至っても、なお踏みとどまって抵抗を続けられるよう、館の近く、せいぜい1～2キロメートルにある天嶮（てんけん）、つまり山岳、丘陵、河川の曲がり角、島などに持久戦に応えられる十分な防備を施したもので、当時一般に「要害（ようがい）」と呼ばれていた」（三条市史上巻 P.146 より抜粋）

「要害は、戦争が激化、常習化する15世紀以降、特に必要が高まり、盛んに築かれたものと思われるが、館の近くに後ろ楯となる山丘や段崖などの有利な地形が求められない場合には、館の防備を一段と強化した平城へ発展するものと見うけられる。

山城の中には、峠や渡り場などの交通の警固、監視を目的とした城砦、哨堡などもあり、この場合は在番する将兵の常居の館の設けのない場合が多く、館跡と山城跡は、常に館－要害の関係図式では理解できない部分があることを知らなければなるまい」

（同書 P.148）

として、三条市域内に認められる中世城館跡の12カ所が紹介され、

「山城跡はほとんどが堀切、曲輪（くるわ）、土塁などの遺構を止めている。しかし、これらの城館は、三条城を除いては、城歴を正す史料がなく、口碑、伝承もきわめて少ない」としている。（同書 P.150）

道心坂にある「月岡城」は次のように述べられている。

名称	所在	種類	現状	備考
月岡城	月岡字桜山 通称「むじな山」	山城	五十嵐川を北に見おろす標高約210mの山頂に25×25mの主廓が屹立、北と南へ下る尾根にも曲輪、堀がみられる。主廓北側は林道が通り旧規を失う。	突岡治衛門、永禄中在城と言う（『越後野志』） 五十嵐川をはさみ北の大崎城（要害）と 相對し、西山足に大浦の集落がある。

月岡城跡に関する本文は次のとおり。

月岡城跡

月岡は五十嵐川左岸の低い段丘上に形成された集落で、鎮守槻田神社の祭神は「津の大明神」（『安田領検地帳』）と呼ばれている。

明治時代まで舟着き場があって、ここから対岸の東大崎へ越えた。一方道心坂を経て山の腰をめぐる大浦へ通ずるが、ここから川向いの籠場への渡り場があり、麻布経由で加茂方面への山街道に連なっていた。

道心坂の真南にそびえる標高約154mの山の頂きに小さな山城跡がある。通称「ドンドン山」と呼ばれるこの山は、近年建設の林道が城跡の中心部を分断したため旧観が失われている。

頂上の30m×25mの切り立った曲輪が主廓で、東側へゆるやかに下る広い尾根に腰曲輪、その先に広い緩傾斜地があり、その前端は断崖となっている。

主廓の西下方に広い腰曲輪、南は延びる尾根は削平されて細長い曲輪を設け、二か所大きく掘り切られている。北方へ延びた尾根にも一か所掘り切りがある。

城跡の北麓に道心坂、南麓には渡し場のある大浦が眼下に見られ、五十嵐川対岸の大崎城と相對し、西北に深谷をへだてて如法寺跡が指呼の間にある。

小規模ながら戦国期の構築で、如法寺と同時期に成り、五十嵐川左岸の街道、渡し場を瞰制、守備した重要な砦で、如法寺城と一体となって道心坂－大浦間を固めていたものであろう。永正の乱、御館の乱などの三条城をめぐる攻防戦のたびに、これら城砦の攻防が繰り返されたことであろう。（同書P.163～）

